

トーゴにおけるカリスマ派キリスト教と妖術

平成 17 年度入
派遣先国：トーゴ共和国
宮田 寛章

キーワード：カリスマ派キリスト教、妖術、悪魔払い、告白、トーゴ

対象とする問題の概要

西アフリカのトーゴでは 1990 年代以降、他のギニア湾沿岸諸国と同様に、カリスマ派と呼ばれるキリスト教の活動が急激に活発になってきている。カリスマ派においては、人びとに振りかかる不幸や災難は悪魔の使いである悪霊の所業が原因であり、これら悪霊をキリスト教の三位の一つである聖霊の働きによって駆逐することで、日常生活における成功や繁栄をえることが教義や実践の中心におかれる。

ここで悪霊と呼ばれるものは、抽象的な概念としての「害悪」という意味ではなく、妖術師や土着の精霊という具体的存在である。とくに妖術は日常生活においてあらゆる災いや不幸をもたらす存在として人びとを苦しめてきた。従来の教会は妖術など土着の霊的な力の存在に対して懐疑的であり、人びとが抱える妖術問題に対応することができなかった。カリスマ派キリスト教はそれらの存在を認め、聖霊の力による「悪魔払い」をおこなうことで、妖術と闘う方法を人びとに提供しているといえる。



図 1：妖術師など悪霊を退散させようとして、「ファイアー」と叫びながら聖霊の力を周囲に投げかける子どもたち。
子どもは妖術の力に対して脆弱だとされている。

研究目的

先行研究は、このようなカリスマ派の妖術に対抗する能力を、カリスマ派が人気を博する主要な理由の一つとして挙げている。しかし、カリスマ派ではない人びとのなかには、「カリスマ派の人たちは何かにつけて妖術、妖術と騒ぐ」、「カリスマ派教会には行きたくない。あそこは妖術師の巣窟だ」と語る人もいる。カリスマ派は妖術に関する問題を解決に導く場でありながら、まさにカリスマ派において妖術がはびこっていると受けとれるこれらの語りは一体何を意味しているのだろうか。本研究では、信者と牧師の語りに注目しながら、カリスマ派教会の礼拝のなかで妖術を放逐する悪魔払いがどのようにしておこなわれているかを詳細に描くことで、上記の疑問に対して一つの答えを示してみようと思う。



図2：教会で妖術に関する告白をおこなう人びと。
左は牧師。

フィールドから得られた知見について

悪魔払いは、信者の祈りや牧師の手かざし（牧師が手を信者の身体にかざし聖霊の力を注ぐこと）によって、信者の身体から悪霊を放出することである。この悪魔払いの前に牧師は、妖術などの悪霊に苦しめられている人を礼拝堂の前方に呼び、かれらがどのようにして悪霊に苦しめられてきたかについて会衆の前で告白をうながす。妖術に関する告白は、妖術の被害者、身近に妖術師がいる疑いがある者、さらには妖術師自身によってなされる。以下では妖術師自身の告白について詳細に見ていく。

告白では、日常生活における様々な問題が妖術と関連付けられて語られる。とくに妖術師自身の告白の場合、不幸や災いといった具体的出来事の経緯のなかに、直接的に関与する妖術師の行為が詳細に叙述される。妖術師自身による告白は、人びとに妖術についてのより詳細な知識を与えていると考えられる。またこれらの告白のなかで、妖術師は長距離を高速で移動したり、ミミズクなどの動物の姿に化けたり、食人をおこなったりする。実はこれら妖術師の行動は、広く社会に共有された「妖術師とはこういうもの」という定型化された妖術師像と一致する。これら一般的な妖術表象は妖術師自身の一人称の物語のなかで語られることで文脈化され、人びとにとっての妖術のリアリティは強化されている。

告白の間に、牧師は「子どもの多くは妖術師です」、「この子どものケースよりもっと深刻なケースを抱えている人がここにはいます。もしあなたのお子さんが同じケースを抱えているならば、その子を（礼拝堂の）前にいかせなさい」、「（ここで語っている妖術師と）同じような振る舞いをする人たちがいますよね」などと語る。このように牧師は、信者の告白における個別的な出来事を普遍化することで妖術の遍在を指摘し、礼拝参加者に日常生活における問題を妖術と関連付けるようにうながしている。



図 3：牧師の手かざしによる悪魔払いを受け、
倒れこんだ女性。

今後の展開・反省点

カリスマ派キリスト教は悪魔払いにおいて、妖術に関する問題に対して一つの解決策を示すと同時に、妖術のリアリティとその遍在性を強化するなかで問題そのものを構築している。このこと自体はアフリカの妖術告発に関する研究においても同様のことが指摘されてきた。しかし今後の課題として、カリスマ派キリスト教と妖術との関係を論じる際に重要な点を三つ指摘しておきたい。一点目は牧師の力の全能性とその正統性である。妖術に関する告白を促し、告白の信頼性を判断し、妖術の存在を認定するのは牧師だからである。二点目は教会内部におけるこのような実践が社会的にどのような意味をもっているかである。妖術に関する告白や悪魔払いはすべて教会内部でおこなわれるが、妖術現象自体は教会外部の人びととの社会関係と無関係ではいられない。三点目は、二点目と関連するが、妖術の存在を強化するカリスマ派の実践のなかで、妖術師と認定される人びとが増えることによって生じる社会問題である。実際にカリスマ派教会の信者によって多くの子どもが妖術師として摘発され精神的苦痛や暴力を受けるといった社会問題が発生している地域がある。以上三点に関して今後も調査を継続していく。